第３部　学外訪問調査

１　学外訪問調査の成果と課題

２　立命館史資料センター準備室

３　甲南学園学園史資料室

４　関西学院大学学院史編纂室

１　学外訪問調査の成果と課題

日本の大学には大学内に蓄積された史資料を整理・保存し、広く社会に公開・利用していくことを目的に多くのアーカイヴズが設置されている。全国大学史資料協議会のホームページによると、2014 年・2015 年現在、105 機関が会員として登録されている。各大学アーカイヴズの設立の趣旨や規模、現在の活動内容を知ることは、本研究においても参考になる点が多く、特に直接訪問して調査することにより、具体的な情報収集・事例研究となり、有意義なことである。第３部においては 2014 年から 2015 年にかけて訪問した大学アーカイヴズにおける調査の成果と課題について報告を行う。まず、訪問先と訪問時期は次の通りである。

①立命館史資料センター準備室*（2014 年 2 月 26 日）

*平成 27 年 10 月、立命館史資料センターへ改称

②甲南学園学園史資料室（2014 年 9 月 3 日）

③関西学院大学学院史編纂室（2015 年 3 月 4 日）

この三校における訪問調査の詳細内容は２章以降に記述するが、調査内容の共通項目として次の点が挙げられる。まず、各大学（法人全体を含む場合もあり）におけるアーカイヴズの設立経緯や組織形態に関する聞き取り調査である。また、史資料の収集・整理・分類・保存等の各作業に直接・間接的に関わってこられた方へ具体的な作業内容の聞き取り調査も行った。そのほか、展示室の見学と、開示していただくことが可能な範囲において保管倉庫等の見学も行った。このように聞き取り調査と見学を行うことにより、各アーカイヴズにおけるホームページやパンフレット、リーフレットでは知ることができない詳細な調査が遂行できた。

今回の学外訪問調査の成果は以下の通りにまとめることができる。

まず、該当アーカイヴズのホームページ等を通じてもある程度の調査は可能であるが、聞き取りを行うことにより、設立当時の背景や組織形態の変遷、人員の配置、年史編纂の流れなど、貴重な情報を伺うことができた点が挙げられる。

また、史資料の収集や整理方法をはじめとした基礎的な作業の重要性を確認し、同時にアーカイヴズ内に専門的・集中的に作業ができる人員が確保されていることの必要性を認識することができた。これと同時に、史資料集や年史の作成には十分な準備期間の確保のみならず、余裕のある作業空間が確保される必要性も確認できた。

そして、これらの作業に多くの人員が関わるほど、アーカイヴズ関連の部署が中心的な役割を担い、調整を行う必要が生じるが、その調整には専門的なスキルが求められることを確認した。

このような過程を経て各アーカイヴズにおいてまとめられた史資料集や年史は、大学の歴史を振り返ることができるものとなるため、詳細に記載されているほど学外からの史資料閲

覧をはじめとした調査依頼への活用例のみならず、学内においても自己点検や外部評価の際にも有効に活用できる事例が見られた。

また、年史編纂作業のみならず、発展的な段階として歴史的研究へと繋ぐ事例が見受けられた。すなわち、該当大学の創立者をはじめとした関連する人物を歴史的観点から調査し、アーカイヴズが独自に発行する紀要にまとめることで、より幅広く、且つ深い研究が行われているケースが確認できた。

そのほか、史資料の収集に向けた各大学での取り組みとして、ホームページやパンフレットのみならず、大学内にて関連する講演会等の場にて卒業生や地域の方へ広くアピールしている事例があることも知ることができた。

各アーカイヴズへの訪問は 3〜4 時間程度の限られた時間であったが､多くの発見があり、これらの成果は今後の本研究プロジェクトを進めて行く際に有意義に活用ができるものと考えられる。

最後に今回の訪問を通じ、今後の研究に向けた課題をいくつか挙げる。

まず、各地にある大学には今回の訪問大学以外にもアーカイヴズが多くあるが、各アーカイヴズにおける取り組みはそれぞれ特徴があり、異なっている。今後は未訪問大学への訪問調査を引き続き行い、より多くの事例を収集する必要があると考えられる。

そして、本学建学史料室職員も訪問調査に参加する機会があったが、調査時には専門的に業務に携わっている立場からの視点を取り入れた聞き取りや見学ができた。今後も可能な限り本研究の関係者が訪問調査に加わることにより、より幅広い調査結果が得られると期待できる。

また、今回の訪問調査では各アーカイヴズにおける設立経緯や組織形態等に関する聞き取りを中心に行ったが、アーカイヴズが学内における自校学習や自校史教育といかに関連しているかについては詳細に調査するに至らなかった。各アーカイヴズの発展的な活動内容をはじめ、今後より幅広い調査が必要になってくると考えられる。

最後に、これまでの調査訪問は既に長年アーカイヴズとしての機能が果たされていたり、研究にも取り組んでいる機関を中心に行ってきた。各アーカイヴズにおける過去の事例は本研究において参考になる点が多くあったが、今後本格的に取り組んでいく予定のアーカイヴズへの訪問を行うことも必要であると考えられる。これを通じることにより、史資料の収集や整理の方法、公開・展示への取り組みをどのように行っていく予定であるのか、本学の研究と情報共有をすることで、新たな取り組みへと繋げる可能性もあると考えられる。

以上、三校の訪問調査を通じての成果と課題を挙げたが、いずれの訪問調査においても各アーカイヴズ関係者の深い理解と幅広い協力を得ることができたための結果であると言える。

（文責：酒勾　康裕）

２　立命館史資料センター準備室

本研究プロジェクトで実施している各地のアーカイヴズの訪問調査として、2014 年 2 月 26 日に学校法人立命館総務部立命館史資料センター準備室（以下、センター準備室とする）にて聞き取り調査を行った。調査にご協力いただいた方は、センター準備室課長である佐々木雅美氏と課長補佐の奈良英久氏、また、調査担当は建学史料室研究員の冨岡勝と三木一司、そして報告者の 3 人であった。調査内容はアーカイヴズの設立経緯と組織形態、活動内容を中心とし、その他聞き取りを行う中で随時伺うという形式で行った。

史資料センター準備室のある西園寺記念館

立命館の歴史は西園寺公望が 1869 年に私塾「立命館」を創始したことに始まるが、中川小十郎が「私立京都法政学校」を開いた 1900 年を創立とし、2000 年に百周年を迎えた。これより前、1981 年に立命館史編纂委員会が発足、同編纂室が設置され、1986 年から 1990 年までの間に『立命館八十五年史資料集』(第一集～第八集および目次) が発刊された。その後、1991 年 3 月に立命館百年史編纂委員会が設置され、『立命館百年史』の編纂事業が開始、1999 年から『立命館百年史』の発刊が始まり、2014 年 6 月現在、通史一から三まで、資料編は一と二が発刊されている。百年という期間に発生した各種史資料は、膨大な点数に及ぶことは容易に想像できる。聞き取りでは、基礎的な史資料の収集は非常に重要であることが強調されており、本学においても早急に取り組むべき事案であるように思われた。

また、センター準備室は現在、教員、職員（専任、専任以外）計 9 人で構成されているが、特に職員の方が実質的な作業を進める上で、非常に大きな役割を果たしている印象を受けた。『立命館百年史　通史三』の執筆には教職員をはじめ、学園に関係した多くの方が携わり、100 人を越える執筆者がいたとのことである。これは、執筆者により執筆内容のトーンや分量が多様であり、これをいかに調整していくかが年史全体のバランスと関わってくることから、担当職員にはこのようなスキルが求められることが分かった。

史資料センター準備室前の展示物

立命館百年史
通史第一巻～第三巻、資料編第一～第二巻
（資料編第三巻は 2014 年 12 月発行）

そして､『立命館百年史』は卒業生からの問い合わせに対する回答、新規事業を立ち上げる際に過去の事例を振り返るなど、多くの場面で活用されているという。

センター準備室では､｢立命館史資料センター｣の設置に向けて、より活発に業務をこなされるようである。これは、年史編纂等で培った貴重な経験の積み重ねがあってのことであろう。今回の聞き取り調査で伺った内容、ご提供いただいた資料等は本学のアーカイヴズの活動に大いに参考になると思われる。（文責：酒勾　康裕）

３　甲南学園学園史資料室

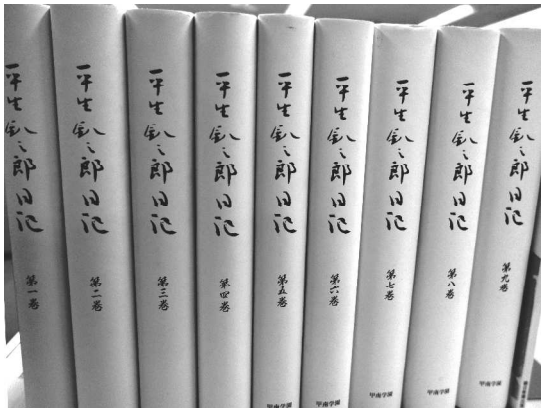
研究プロジェクトで実施しているアーカイヴズ訪問調査として、2014 年 9 月 3 日に甲南学園学園史資料室を訪問し､調査を行った。調査には、甲南学園総務部総務課課長の天野裕介氏と同課課長補佐の溝上真理子氏にご協力いただいた。

学園史資料展示室のある甲南大学１号館

調査内容は、聞き取り調査として、学園史資料室の設立経緯、組織形態、活動内容を中心にお話しを伺った後に、学園史資料展示室を見学し、書庫へ移動して校史関係資料の収集・保管状況などの説明を受けながら所蔵資料を閲覧することができた。

学園史資料室は、甲南学園の運営に協力していた伊藤忠兵衛が公職追放解除後の 1957 年に再び甲南学園理事長に就任し、自らが委員長となる学園史資料室委員会を設置して学園史資料室を開設したことに始まる。伊藤の尽力により開設した学園史資料室は、創立者 平生釟三郎の精神を継承すること、旧制高等学校時代の資料群の保存及びそれらの活用が目的であった。学園史資料室の活動は、『平生釟三郎日記』の刊行、年史の編集、『甲南学園史資料室年報』の発行、資料の収集・保管などである。学園史資料室の業務担当は広報課であったが、2013 年 6 月からは総務課へと変更された。現在の運営は、総務課課長補佐の溝上真理子氏

とアルバイト職員１人の２人体制となっている。教員は、平生研究会や平生日記編集委員会及び百年史編纂委員会に参加するそうである。



『平生釟三郎日記』

『平生釟三郎日記』については、平生研究会において研究が進められ、1995 年に設けられた日記翻刻委員会において彼の 32 年に亘る日記の本格的な翻刻作業が始められた。その後、2009 年から全 18 巻の刊行が開始され、現在第 10 巻までが発刊されている（2015 年 12 月までに第 12 巻まで刊行済）。また、年史は力を注いで編集された五十年史（1971 年刊）を基礎にして、続く 60 年、70 年、80 年の各年史は、各 10 年分の記述を追加する形で区切りとなる年史、記念誌を刊行したそうである。特に五十年史は、平生の日記の裏付けのための資料として、調査のための基礎的な文献として活用するとのことであった。

学園史資料展示室

資料の寄贈については、学園史資料室発行の年報などによって依頼を行い、総務課で受け入れ、分類と登録を行っている。収集する資料は主に創立者の平生釟三郎に関係する日記や書簡などの文書や勲章などの類、学生に関する資料として学生生活に関係するもの、課外活動の記録、写真、旧制高等学校時代のものなどとなっている。収集した資料は、研究者や地域の人たちの研究活動に利活用されることも目的となっている。

学園史資料室の入口

聞き取り調査で対応していただいた天野氏が、今後に取り組むべき課題として挙げたことは、学内事務文書の収集システムが未確立の状態にあるということであった。現在のところ、文書の保存は各部局のスタッフの意識に支えられており、今後は総務課から文書の収集及び保存方法を提案して体制を整える必要があるということであった。　甲南学園では創立者の平生釟三郎のことばを集めた発言

集を自校史教育のテキストとして使用し、甲南小学校百周年を記念して彼の人生を漫画化した本の作成に協力している。自校史教育は創立者平生の人物教育を中心に展開されているが、天野氏と溝上氏は学園史資料室の活動と自校史教育とを通して、旧制高等学校時代から続く学園の雰囲気や空気感､気概などを在学生に伝えていきたいという強い思いを持たれていた。

今回の訪問調査で伺うことのできた甲南学園学園史資料室の活動、資料収集やその活用などの内容、そして、大学のもつ歴史性を伝えていきたいという担当者の思いは参考になるべき点ではないかと思われる。　（文責：三木　一司）

４　関西学院大学学院史編纂室

本研究プロジェクトで実施している各地のアーカイヴズの訪問調査として､今回は 2015 年 3 月 4 日に学校法人関西学院の学院史編纂室(以下、編纂室とする）にて聞き取り調査を行った。調査には学院史編纂室総合主管である川崎啓一氏と大学博物館事務長である林智義氏にご協力いただいた。また、調査担当は本学建学史料室研究員の冨岡勝と三木一司、同室職員の澤田和典、そして報告者の４人であった。調査内容はアーカイヴズの設立経緯と組織形態、活動内容を中心とし、その他については聞き取りを行う中で随時伺うという形式で行った。

学院史編纂室のある時計台

関西学院は 1889 年に W.R.ランバスが神学部とキリスト教主義教育による全人教育をめざした普通学部からなる関西学院を創立したことに始まり、2014 年に創立百二十五周年を迎えた。編纂室は発足当初、学院史資料室という名称で 1978 年 6 月 1 日に図書館貴重図書室内の一角に開設された。その後、1985 年 3 月に一戸建て住宅である日本人教師住宅 C 号館（建物は昭和 4 年に建造）に移転、さらに、1998 年 1 月に現在位置する時計台に移転された。また、2000 年 4 月 1 日より現部署名になった後、2014 年 4 月に組織替えがあり、それまで学校法人関西学院本部に属していたが、現在は関西学院大学内の大学博物館に属している。組織としては大学内の組織であるが、取り扱う史資料は関西学院内の幼稚園から小中高まで全てカバーしているという。編纂室には現在、専任職員 2 人、アルバイト職員 3 人の体制を取り、室長は教員が 2 年任期で兼務している。

活動内容は学院史資料室の頃より学院に関するあらゆる史資料を収集するところから始まり、『関西学院百年史』（資料編Ⅰ・Ⅱ、通史編Ⅰ・Ⅱ、計四巻および通史編索引）を 1994 年から 1999 年に渡り刊行した。百年史を刊行する前には四十年史、五十年史、六十年史、七十年史が刊行されたが、『関西学院百年史』はこれまでの年史を引き継ぐ形ではなく、全てゼロから編纂を行い、刊行後は研究機能の強化と百五十年史刊行に向けた準備の意味合いも込めて組織を現在の名称に変更したという。

学院史編纂室主要刊行物１

学院史編纂室主要刊行物２

また、1989 年の創立百周年時には『関西学院の１００年』（図録）、2001 年に『関西学院事典』、2014 年の創立百二十五周年時に『関西学院事典　増補改訂版』と記念誌『Gift for Future 未来に贈る 125 年』をそれぞれ刊行するほか、研究論文の発表や講演会の記録、資料の紹介を行う『関西学院史紀要』も年一回発行することにより研究活動に繋げるなど、大変活発な活動が行われていることが印象的であった。『関西学院事典　増補改訂版』については関西学院大学の Web 上でも公開されており、幅広い情報発信と情報が随時更新可能であり、この取り組みは参考になる点であった。

このような活動が可能であることは、膨大な点数にのぼる史資料の保存・保管がされていたためと考えられるが、実際に関西学院は戦災や震災による被害が大きくなく、古くからの史資料が多く保管されているという。昭和初期の文部省の資料もそのまま残されているため、本学に関係する史資料が発見できるかもしれないという貴重な情報も伺うことができた。

編纂室では上記以外にも広報活動の一環として、ニュース性のある記事や、卒業生が在学当時の様子を語った原稿を掲載する『学院史編纂室便り』を年 2 回発行している。このほか、半期に 1、2 回学内外より講師を招き「関西学院史研究会」を開催するなど幅広い活動を行っているとのことであった。長年の歴史をいかにまとめ、発信していくべきか過去と現在をつなぐ役割の大切さも実感することができたと言える。そして、今回の聞き取り調査で伺った内容、ご提供いただいた資料等は本学のアーカイヴズの活動に大いに参考になると思われる。

（文責：酒匂　康裕）